

夏目漱石

三山居士



三山居士

二月二十八日には生なま暖あたたかい風が朝から吹いた。その風が土の上を渡る時、地面は一度に濡ぬれ尽くした。外を歩くと自分の踏む足の下から、熱に冒された病人の呼い息きのようなものが、下げ駄たの齒はに蹴け返かえされるごとに、行く人の眼鼻口を悩ますべく、風のために吹き上げられる気色けしきにみえた。家へ帰って護ゴ謨ム合が羽つを脱ぐと、肩当かたあての裏側がいつのまにか濡れて、電灯の光に露のような光を投げ返した。不思議だからまた羽織を脱ぐと、同じ場所が大き

く二か所ほど汗で染め抜かれていた。余はその下に綿入を重ねたうえ、フラネルの襦袢と毛織の襯衣を着ていたのだから、いくら不愉快な夕暮でも、肌に煮染んだ汗の珠がこゝまで浸み出そうとは思えなかった。試ろみに綿入の背中を撫で回してもらおうと、はたしてどこも湿っていた。余はどうしていちばん上に着た護謨合羽と羽織だけが、これほど烈しく濡れたのだらうかと考えて、ひそかに不審を抱いた。

池辺君の容体が突然変わったのは、その日の十時半ごろからで、一時は注射の利目がみえるくらい、落ち付掛け

たのだらそうである。それが午過ひるすぎになつてまただんだん陰
 悪おちいに陥つたあげく、とうく絶望の状態まで進んでき
 た時は、余が毎日の日課として筆を執りつゝある「彼岸
 過迄」をようやく書き上げたと同じ刻限である。池辺君
 が胸部に末期まつごの苦痛を感じて膏汗あぶらあせを流しながら藻搔もがい
 ているあいだ、余は池辺君に対してなんらの顧慮も心配
 も払うことができなかつたのは、君の朋友ほうゆうとして、朋友
 にあるまじき無頓着むとんじやくな心持を抱いていたという点におい
 て、いかにも残念な気がする。余が修善寺しゆぜんじで生死の間に
 迷うほどの心細い病み方をしていた時、池辺君は例いつもの

とおりの長大な軀幹からだを東京から運んできて、余の枕辺まくらべに坐すわった。そうして苦にがい顔をしながら、医者いしやに騙だまされて来てみたと言いった。医者いしやに騙だまされたという彼かれは、もとより余を騙だますつもりでこういことばう言葉を発はしたのである。彼の死ぬ時には、こういう言葉を考かんがえる余地すら余に与あたえられなかった。枕辺まくらべに坐まって目礼めくれいをする一いっ分ぶん時じさえ許ゆるされなかつた。余はたゞその晩やはんの夜半よはんに彼の死顔しにがおを一目見ただけである。

その夜は吹荒ふきすさむ生温なまぬるい風の中に、夜着よぎの数かずを減へらして、常つねよりは早く床とこに就ついたが、容易やすに寝ねつかれない晩ばんであ

った。締りしまをした門かどを揺り動かして、使いのものが、余を驚かすべく池辺君の訃ふをもたらしたのは十一時過であった。余はすぐに白い毛布けつとの中から出て服を改めた。車に乗るとき曇どんよりした不愉快な空を仰いで、風の吹く中へ車夫を駈かけさした。路は齒の回らないほど泥濘ぬかっている。ので、車夫のはあく、息遣いきづかいが、風に攫さらわれて行く途中で、おりく、余の耳を掠かすめた。不断ふだんなら月の差すべき夜よと見えて、空を蔽おほう気味の悪い灰色の雲が、明らさまに東から西へ大きな幅の広い帯を二筋ばかり渡していた。そのあいだが白く曇って左右の鼠ねずみをかえって浮

き出すように彩いろどった具合がことさらに凄すごかった。余が池辺邸に着くまで空の雲は死んだようにまるで動かなかつた。

二階あがへ上つて、しばらく社のものと話した後あと、余は口の利きけない池辺君に最後の挨拶あいさつをするために、階下へやの室へ下りていった。そこには一人ひとりの僧が経を讀んでいた。女が三四人次の間に黙つて控ふだんえていた。遺骸ぬのは白い布ぬので包んでその上に池辺君の平生ふだん着たらしい黒紋くろもん付が掛つけてあつた。顔も白い晒さらしで隠かくしてあつた。余が枕辺まくら近く寄つて、その晒さらしを取り除とけた時、僧は読経どきようの声をこゝろびたり

と止めた。夜半の灯に透かして見た池辺君の顔は、常と
 なんの変わることもなかった。刈り込んだ髯に交る白髪が、
 忘るべからざる彼の特徴のごとくに余の目を射た。ただ
 血の漲ぎらない両頬の蒼褪めた色が、冷たそうな無常
 の感じを余の胸に刻んだだけである。

余が最後に生きた池辺君を見たのは、その母堂の葬儀
 の日であった。柩の門を出ようとする間際に駈け付け
 た余が、門側に佇んで、葬列の通過を待つべく余儀な
 くされた時、余と池辺君とははしなく目礼を取り換わし
 たのである。その時池辺君が帽を被らずに、草履のまゝ

質素な服装なりをして柩あとの後に続いた姿を今見るように覚えて
ている。余は生きた池辺君の最後の記念としてその姿を
永久に深く頭の奥に仕舞しまっておかなければならなくなつ
たかと思うと、その時言葉を交わさなかつたのが、はな
はだ名残なごり惜おしく思われてならない。池辺君はその時から
すでに血色がたいへん悪かった。けれどもその時なら口
を利くことが十分できたのである。

(明治四五・三・一)

日本文学電子図書館

三山居士

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第10卷」角川書店
昭和42年10月10日 6版発行



日本文学電子図書館